

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
伊藤あさ子	女 性	8 6 歳 H27.8.15 現在	1 6 歳	庭 野

「学徒動員で工廠へ ～ 神様のご加護」

私は決して戦争を懐かしんだり美化しているわけではありません。今、当時を振り返ると、日本中が拳国一致だとか、日本は神国だから絶対に勝つとか、お上から言われていたことを子ども心にただただまじめに受け止めていたと思います。実家が豊橋で、幼少期を軍都豊橋で過ごしたので、戦争体験は山のようにありますが、一つあげさせていただくなら豊川海軍工廠です。

私は、運命の8月7日の空襲は夜勤明けで豊橋の自宅にいて、6月19日の豊橋空襲の日は工廠にいて、両方の難をのがれました。母親に頼んだ買ってもらったお守りが守ってくれたように感じました。私の家は、渥美郡高師村大字磯部字大山にありました。大崎に海軍飛行場があり、海軍廠があったので爆撃もありましたが、私の家は焼けずにすみました。

昭和19年4月15日、私は豊橋高等家政女学校（現在の藤ノ花女子高等学校）から学徒動員で先生方、同級生と共に入廠しました。家政女学校からは200名以上が入りました。私は第11女子寄宿舎に入り、職場は機銃部第1機銃工場でした。25ミリの機銃の本体を造るのです。今思えば、15や16の少女に急に造れと言われてもできるものではありません。オシャカばかり造っていました。オシャカというのは不良品のことで、発射実験をして使い物にならないことです。当時は、千両にある発射場で実験をしていました。オシャカで使いものにならない機銃が多かったと聞きました。でも、直接誰の責任か分からないし、仕上げは別の部で行って行っていたので、叱られたことはありませんでした。でも、戦争に勝つ勝つと思って仕事に励みました。

昭和19年の暮れ頃だったと思います。誰も口外しませんでした。日本が戦争に勝てるのか不安を感じるようになりました。玉砕があるたび、場内に「海ゆかば」流れるのです。そのたびに、「ああ、また南の島が玉砕か、これで日本は本当に勝てるのかしら。」と私ごとき者がそう思いました。それまでは、神国だから絶対負けるはずはないと信じていましたから、その曲が

海ゆかば
海行かば 水漬く屍
山行かば 草生す屍
大君の辺にこそ死なめ
かへりみはせじ

当時の大日本帝国政府が国民精神
強調週間に制定した際のテーマ曲で
す。太平洋戦争でラジオ放送の戦果
発表（大本営発表）が玉砕を伝える
際に冒頭曲として流されました。
(ウィキペディアより)

流れると暗澹たる気持ちになりました。他の皆さんもそう思っていたと思います
が、誰も口にはしませんでした。また、寮で山本五十六連合艦隊長官が亡くな
ったというニュースも流れました。後で分かったことですが、亡くなったのは昭和
18年（1943）4月18日だったそうですから、1年以上も経ってから知ら
されたわけです。都合の悪いニュースは隠されていたのです。

職場でたった一人だけ女性の組長さん
がみえました。10歳ぐらい年上で
きりっとしたとても立派な方で、柳原
はま子といわれました。工員の中に、
1割ぐらいの学徒が入って仕事をす
るようになったので、足手まとい
はざです。でもその組長さんは、と
ても優しく教えてくださいました。

○ 空襲後の工廠

空襲の3日後に初めて出勤しました。海軍工廠横の佐奈川には、まだ死体
がごろごろしていました。夏の暑さのせいか、お腹が大きくふくれあが
っていました。動員学徒の早稲田や慶応の大学生の皆さんが、ツルハシ
で死骸を引きあげていました。工廠は一面焼け野原で見
る影もなく、機銃部もなくなっていました。大きな穴があちこちに
空いていて、スライス盤などの機械もあちこちに倒れてぐし
ゃぐしゃになっていました。

私と同じクラスの子達も大勢亡くなりました。私の一番の親友だった都築和子
さんも亡くなっていました。「死ぬ時はいっしょに死のうね。」と約束
していたんです。私はショックで、しばらく立ち直れませんでした。空襲警報
で逃げたそうですが、工場長さんから「都築、防空壕に入れ！」と何
度も言われたのに、なぜか入らなかったそうです。和子さんは頭がよ
くて、組長をしていた子です。何で防空壕に入らなかったのでしょう。
死に神に取りつかれたのでしょうか。でも、防空壕にいた工場長さん
も、学徒の私たちに「風邪をひくなよ。」と気遣ってくださった隊員
さんたちも亡くなりました。のろまな私
がその場にいたら、絶対死んで
いたと思いました。

その後は片づけ作業で、アリのように何人かで機銃の銃身などを千両の方へ何
回も何回も運んでいました。千両には亡くなった方の死体を埋葬する場所
もあり、お化けが出ると聞きました。すれ違うトラックや牛車を見ると、
一つの棺おけに何人も詰めて運んで
いました。手や足が外に出て揺
れているのです。機械や建物の
下敷きになった人や防空壕で
生き埋めになった人たちのよう
でした。千両の山でそんな作業
をしている時、玉音放送を聞
きました。



伊藤さん所有の勤務優等証

○ 寄宿舎での生活

寄宿舎では、食事のたびに拝むようにして唱えることばがありました。

「この食物が食膳に運ばれるまでには、幾多の人々の労力と神仏の加護によることを思って感謝いたします。私たちはこの食物に向かって、うまいからとてむさぼる心、まずいからとて厭う心は起こしません。私たちは勤労以って君国に奉ぜんことを誓います。」と言って合掌し、食べ始めるのです。

食事には、どんぐりの混ぜご飯、大豆がすのご飯などで、野菜にイモムシが入っていたこともありました。それがアルミの器に1ぱいだけで、申し訳ないですがおいしくないのです。ですからこんな替え歌を男子工員が歌っていました。

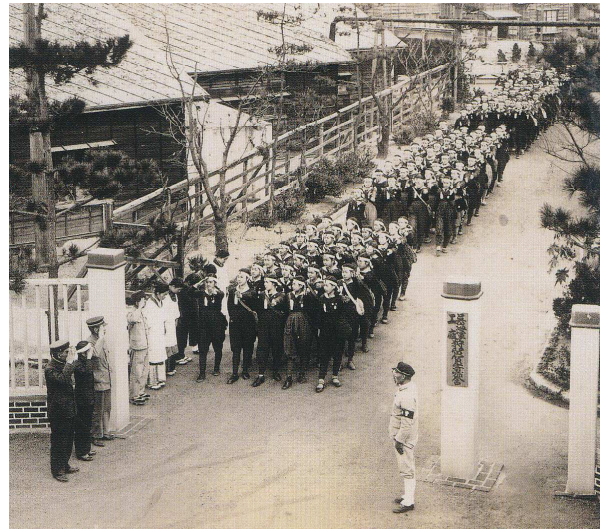
「いやじゃありませんか工廠は。金の茶わんに竹のハシ、
仏様ではあるまいし、1膳飯とはなさげなや。」

田舎から通勤している子は、イモ切り干しをよく持ってきて食べていました。私たちはついついイモに目がいってしまいました。

寄宿舎から正門に入る時は、きちんと並んで入るのが日課でした。寄宿舎の前で組長の和子さんが整列の号令をかけ、並んで正門まで行きますと、守衛さんが大きな声で、「歩調 とれ！」と声をかけられます。みんなきちんと行進をし、先頭の組長は敬礼をして正門を入るのです。足並みをそろえないと叱られました。

20年1月13日、三河地震が起きました。私たちは寮の階段にしがみついて、「ワーワー」泣き叫びました。防火用水にしていた四斗樽の水がダバン、ダバン揺れてあふれました。大騒ぎになりましたが、建物は無事で、ケガをした人もいなかったようです。

最近年のせいか、戦後70年の新聞記事やテレビ報道をよく見るせいか、戦争のことを思い出して仕方ありません。当時のことを思い起こしますと、何とも言えない空しさやらさみしさやらが胸に去来して、二度と戦争をしない国になりますようにと祈るばかりです。この頃は、その思いが届いていないような不安に駆られるようになりました。でも、私どものように長生きできるありがたさを感じています。



呉海軍工廠の女子学徒の出勤風景。豊川でも同様だったそうです。(写真：大和ミュージアム公式ガイドブック)